

●●●モネとジヴェルニーの画家たち●●●

印象派の画家として名高いクロード・モネ(1840～1926)は、1883年からパリの北西約80キロに位置するセーヌ川右岸の小村ジヴェルニーに移り住み、村や近隣の風景を描いて数多くの名作を残しました。わたしたちのよく知る《睡蓮》や《積みわら》、《ポプラ並木》といったモネの名高い連作は、このジヴェルニーで制作されたものです。

モネが住み始めた当時のジヴェルニーは、丘の下を走るただ一本の曲がった道に沿って石造りの家屋や教会、村役場が並び、300人ほどが暮らすだけの典型的なフランスの田舎の小村でした。その後、ジヴェルニーは、モネによる先の《睡蓮》などの作品によって世界的に名が知られ、多くの芸術家から注目されるようになりました。ジヴェルニーにやって来た芸術家の多くは、比較的長い期間滞在し、この土地特有の、雨から晴れへと目まぐるしく変化する天気、時に辟易しながらも屋外で制作活動を行いました。1887年には7、8人が活動しているだけだったジヴェルニーですが、1890年までには50人を超えるようになっていました。そして1885年から1915年までの30年間に、19カ国を超す、300人以上もの芸術家が訪問し、長期滞在するような「芸術家コロニー」へと発展していったのです。セザンヌやボナールといったフランスの画家、その他のヨーロッパの画家に加え、日本からも数名の画家がジヴェルニーを訪れました。その中には岡山にゆかりの深い児島虎次郎もいました。

しかし、ジヴェルニーの訪問者の70％以上を占めていたのは、アメリカからやってきた画家たちでした。モネを理解しようとし、また彼への賛辞として一連の《積みわらの習作》を描いたジョン・レスリー・ブレック(1860～1899)、早くも大正10(1921)年4月に美術雑誌(『美術月報』第3巻7号)の中でアメリカ印象派の画家として紹介されていたウィラード・メトカーフ(1858～1925)、モネの友人で彼の死後に追悼のエッセイを発表し、日本にも暮らしたことがある女流画家リーラ・キャボット・ペリー(1848～1933)、妻で画家のメアリー・フェアチャイルドと一緒に村の古い小修道院の家屋を購入して長期滞在し、数多くのアメリカ人画家を支援したフレデリック・ウィリアム・マクモニーズ(1863～1937)、モネの義理の娘シュザンヌ・オシュデと結婚し、彼女の死後は姉のマルト・オシュデと再婚したセオドア・アール・パトラー(1861～1936)、光溢れる庭にたたずむ戸外の女性を明るい色彩と大胆な筆遣いで描いたフレデリック・カール・フリージキー(1874～1939)、そのフリージキーの友人で、彼と共にジヴェルニーで絵画教室を開いたアメリカ印象派の重要人物リチャード・ミラー(1875～1943)といった個性的な面々です。彼らはモネに憧れ、その影響を受けつつも、独自の表現を追い求めました。そしてフリージキーやミラーらは、より装飾的な印象主義を展開して「ジヴェルニー・グループ」として知られるようになったのです。

この展覧会は、モネによる11作品とジヴェルニーの画家たちによる63作品、計74点の油彩画によって、ジヴェルニーにおけるモネの印象主義の展開を辿りつつ、「芸術家コロニー」の大半を占めたアメリカ人画家たちの創作活動を展観するものです。印象派の巨匠モネの作品と、日本では未だ十分に紹介されていないアメリカ印象派の画家たちの作品を併せてご覧いただくことによって、ジヴェルニーの「芸術家コロニー」で繰り広げられた活発な芸術活動に思いを馳せていただければと思います。

【学芸員 橋村直樹】



クロード・モネ 《積みわら(日没)》
1891年 油彩・キャンヴァス ポストン美術館蔵
Photography © Museum of Fine Arts, Boston



クロード・モネ 《睡蓮の池》
1900年 油彩・キャンヴァス ポストン美術館蔵
Photography © Museum of Fine Arts, Boston



フレデリック・カール・フリージキー《百合の咲く庭》
1911年以前 油彩・キャンヴァス テラ・アメリカ美術基金蔵
Photography © Terra Foundation for American Art, Chicago



リチャード・エミール(エドワード)・ミラー《水のある庭》
1910年頃 油彩・キャンヴァス テラ・アメリカ美術基金蔵
Photography © Terra Foundation for American Art, Chicago



稲葉春生「老椿黒猫」

2011年新春
アートと仲よくなるためのワークショップ

来館者が参加しやすく、そして興味関心のある「切り口」から、作品や美術、そして人やことに「出会うきっかけづくり」を提供することが、美術館におけるワークショップの目的と考えています。切り口をできるだけ多く提供するため、2010年夏に引き続き、2011年新春ワークショップを以下の通り開催します。

切り口1:アーティストと出会う&描画材の多様な可能性を体感する

— 墨で遊ぶ —

日 時／1月8日(土)13:30～15:30
講 師／藤本万須美氏(遊書家)
材料費等／500円
持 参 物／お気に入りの和紙・布裂などあれば持参
定 員／20人(小学校4年生以上)
場 所／地下1階研修室及び展示室

クレパスでつくる～カラーカーボンとひっかき絵～

日 時／2月11日(金・祝)13:30～15:00
講 師／鳥越亜矢氏(山陽短期大学講師)
材料費等／100円
持 参 物／ひっかくことができるもの
(くし・わりばし・使い捨てフォークなど)
定 員／20人(幼児～大人まで:親子参加歓迎します!)
場 所／地下1階講義室及びホワイエ及び屋内広場

切り口2:アーティストと出会う&展覧会をより楽しむために

— フェルティングでつくらう —

日 時／1月16日(日)13:30～15:30
講 師／上野真知子氏&川井由夏氏(展覧会出品作家)
材料費等／500円
持 参 物／特になし
定 員／30人(小学生以上)
場 所／地下1階研修室及び展示室

— リメイクシャツ —

日 時／1月23日(日)13:30～15:30
講 師／三橋遵氏&島田清徳氏(展覧会出品作家)
材料費等／500円
持 参 物／着古したシャツ
定 員／30人(小学生以上)
場 所／地下1階研修室及び展示室

平成22年度 展覧会スケジュール(12月～3月)

特 別 展	12月21日(火)～1月30日(日)	CULTEX 共通言語としてのテキスタイル 織る・編む・ひろがる テキスタイルの形と色
岡山の美術	2月25日(金)～4月10日(日)	モネとジヴェルニーの画家たち
	11月12日(金)～1月30日(日)	緑川洋一の写真「南仏を行く」
	12月 7 日(火)～1月30日(日)	生誕120年記念 稲葉春生展
	2月 1 日(火)～3月21日(月・祝)	内田百閒と谷中安規
	2月 1 日(火)～3月21日(月・祝)	岡山県立美術館所蔵コレクション展

美術館講座

美術館講座	1月22日(土)	CULTEX 海外から注目される日本の 現代テキスタイルについて	福富 幸(学芸員)
	2月 5 日(土)	内田百閒と谷中安規	子川さつき(学芸員)
	3月 5 日(土)	水墨画～描画材と表現方法～	岡本裕子(主任学芸員)
	3月19日(土)	モネとジヴェルニー	妹尾克己(学芸課長)

編集後記

美術館ニュース91号をお届けします。岡山・美の回廊展が終わり、息つく間もなく岡山の美術展の、もっと伝統工芸白磁・青白磁、1氏賞展、緑川洋一の写真展に続き、特別展の日本伝統工芸展が始まりました。皆様にごの館ニュースをお届けする頃には、稲葉春生展とCULTEXを開催している最中だと思います。そんな借用と返却に慌たしい中、お客様に喜んで頂けたということは、次の展覧会へ向けての一番の励みになると日々実感するばかりです。
【O.M.】

美術館ニュース 第91号
発 行：2010年12月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

坂田一男研究会の活動を紹介します。この会は平成21年1月に立ち上がり、現在会員は88名となっている。坂田一男が亡くなって54年、坂田を直接知っておられる方々もご高齢になり、話を聞くことができる内に聞きいとおこうということで、話を聞く催しを数回行ってきた。また美術史の専門家の方や批評家の方に坂田一男について語っていただく講演会を開催。昨年は酒井忠康世田谷美術館館長、今年は美術評論家の中原佑介氏をお招きした。昨年は坂田一男の岡山での足跡を巡るバス旅行を実施し、美星町の坂田家、倉敷市玉島のアトリエ跡、生誕地の岡山市船頭町、父快太郎が開業した坂田病院の跡地を巡った。また、県立美術館での「生誕120年記念 国吉康雄・坂田一男・小野竹喬・森谷南人子」にあわせて、作品の前で坂田一男について語り合うという催しを開催した。

「△□研究会」というと厳めしい近づきたいイメージになってしまうが、至って気楽に参加していただける会である。坂田一男という人と作品に興味を持ち、もっと知りたいという好奇心を持たれている方ならどなたでも大歓迎である。会員にしか催しの案内を届けられないのは残念であるが、年会費は1000円なので気軽に入会していただければと思う。会報誌も発行しており、坂田一男の言葉や会員の寄稿を収録している。会員の熱意は大変なものである。ここまで熱く語れる画家はそうはいないのではないかと思います。どこがそんなに魅力的なのか。抽象絵画は分からないがと言いながら、坂田の生き様に強く惹かれると言う方が多い。絵を売らず、豆腐一丁の質素な生活を送りながら、「前衛は無位無冠」と言ってひたすら絵画の探求に邁進した。現代では坂田のように生きようと思ってもまずできない。その生き方は筋が通っており、苦難に満ちてはいるが、爽快な印象を受ける生涯である。「独創的な作家というのは、誰のことも真似しない人ではなく、誰も真似できない人のことである。」というシャトーブリアンの言葉は坂田にぴったりだろう。【学芸課長 妹尾克己】

稲葉春生 北野神社御座所の古椿を描いた本作品は、大画面でありながら、紅色の鮮やかな椿の花や葉や下草の隅々まで一枚一枚丁寧に描き込まれ、細部まで神経のいきとどいた表現となっている。菱田春草の「黒き猫」重要文化財 永青文庫蔵（一九〇〇年）を意識したと思われる黒猫は、眼が鋭く印象強い。たらし込みの技法も用いられた琳派風の装飾的表現と、四条派の叙情的な雰囲気も兼ね備わった作品となっている。稲葉春生（一八九〇～一九七六）は総社市新本出身で、岡山県師範学校を卒業後、県内

「老椿黒猫」昭和五年（一九三〇）作 縦二五五〇×横一七五〇㎜

岡山・美の回廊展を終えて

特別展『岡山・美の回廊』はお陰様で無事終了しました。全国各地から集まり全館を埋め尽くした出品作はインスタレーション3件を含めて220件ほどに上るという大規模展でした。そこで返却をほぼ終えた今、館内には幾らかの虚脱感と疲労感が漂っています。が、それ以上に多くから寄せられたご厚意に励まされ、そして何よりも岡山という地に伝えられ蓄えられてきた美術や文化の力を再認識したことや、未来へ継続し伸びていく期待に心弾む想いが大きいというのが実感です。

本展は第25回国民文化祭が岡山県下のすべての市町村で開催されるに際し企画したものです。従来、開催県の中核館が概ね美術公募展の会場として機能する場合が殆どであったのに対し、当館は独自展を打ち出しました。そんな中、主たる企画者であった廣瀬学芸員が病気で休職するという不測の事態が生じたことで、急遽学芸員各人各一章を分担しつつ構成するという内容に軌道修正を図りながら取り組みました。ともあれ、開館23年目を迎えた当館の現段階での最高のパフォーマンスを示した展覧会といえるでしょう。

しかしながら館員はあくまで黒子です。本展がもし賞せられることがあるとするならば、岡山の美術界において作家として所蔵者として庇護者として鑑賞者として支え、また当館の活動をボランティアのように直接的に、あるいは間接的に温かく見守りつづけてきてくれた大勢の方々に捧げられるものであるに違いありません。深く感謝する次第です。開館準備室以来、最古参となってしまった私も、「岡山の美術」の高さ厚さ深さを今更ながら痛切に感じる事ができて幸せでした。本展を通じて獲得した経験や人間関係、信頼感等はこれからの館の運営のあたり、必ずや大きな財産となって活用されることと確信しています。本当にありがとうございました。【副館長 守安 収】



2階第1会場



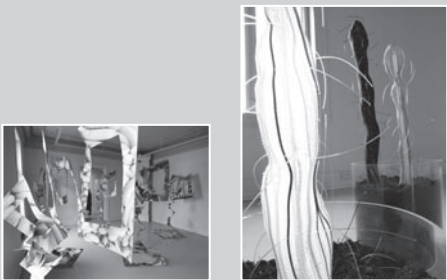
地下1階第2会場

現代テキスタイルの魅力を紹介するふたつの展覧会

2010年12月21日(火)～2011年1月30日(日)

CULTEX textile as a cross-cultural language

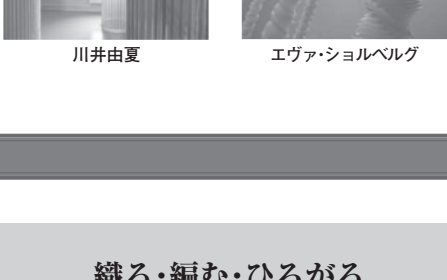
共通言語としてのテキスタイル ー共振する思考ー



上野真知子



島田清徳



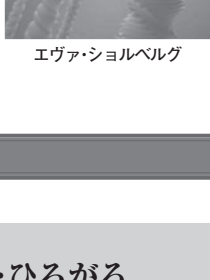
川井由夏



アニケン・アムンセン



ガブリエッラ・ヨーランソン



エヴァ・ショルベルグ

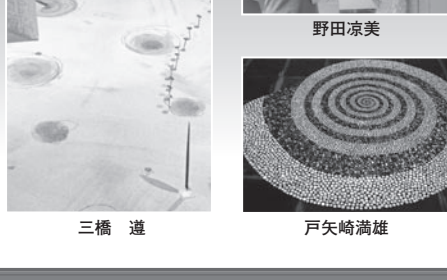
この展覧会は、ノルウェーと日本からそれぞれ3名の現代テキスタイル作家が選ばれ、ペアとなって1年間、互いの国の文化や歴史について意見交換を行い、それぞれのスタジオを訪問するなど時間を共有しながら思考を深め、制作を行うというプロジェクトの成果です。イギリスのUSA芸術大学教授レスリー・ミラーが企画し、呼びかけたもので、選ばれた作家は、上野真知子×アニケン・アムンセン、川井由夏×エヴァ・ショルベルグ、島田清徳×ガブリエッラ・ヨーランソンです。CULTEXという単語は、Culture と Textile を結びつけたもので、この展覧会のために作られた造語です。

上野とアムンセンは、上野が植物をインクジェットプリントした布を貼り合わせたミラーシートを、アムンセンがテグスで編んだ不思議な造形物を温室の中に閉じこめました。全世界的な地球環境や自然破壊に対する不安や関心が共通の問題として捉えられています。川井とショルベルグの作品は、薄いメッシュのナイロン布を筒状に巻いて形作った円柱を複数立て、その中心に絞ったり織ったりさまざまな染織技法によって制作されたショッキングピンクの布を入れ、一番外側のメッシュ布の間にはモノクロームの写真が入っています。対話を重ね、思考を深めた結果、完成度の高い作品が生まれました。島田とヨーランソンは、島田が膨大な布の襞を集め、胎内回帰を連想させる白い空間を作り、ヨーランソンは、裂いて砕いたリネンを複雑な色に染め、型にはめて固めた複数の輪っかを作り、インパクトの強いコラボレーションに仕上がりました。三組三様の共同制作をご覧ください。

織る・編む・ひろがる 現代テキスタイルの形と色



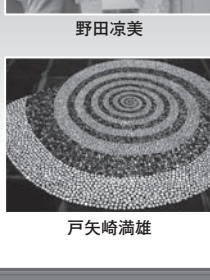
小林正和



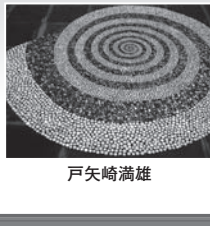
三橋 遼



草間結雄



野田涼美



戸矢崎満雄

もうひとつの展覧会は、岡山県立大学で教育活動に携わり、現代テキスタイルの分野において、意欲的な表現活動を行う5名作家、故小林正和、草間結雄、戸矢崎満雄、野田涼美、三橋遼の作品を紹介します。2004年に急死した小林については、妻で同じく造形作家として活躍する小林尚美の協力を得て、代表作のひとつ稲葉を組んだソファ「ROOM-2」を再制作し、尚美とのコラボレーションを紹介します。草間は近年取り組んでいるコイリングの作品、戸矢崎は屋内広場に中古ボタンのインスタレーションを、野田はギフト用のリボンテープを編んだネットにさまざまなオブジェを取りつけます。三橋は、染めた布をベースに手細工の金属片や木片を添えた詩情あふれる作品を出品します。

ふたつの展覧会で、糸や布だけではなくさまざまな素材が使われ、技法も「染め」「織り」以外にたくさんあることがわかると思います。多彩な表現を見せる現代のテキスタイルの楽しさ、面白さに興味をもっていただけたら嬉しいです。

【学芸員 福富 幸】

生誕120年 稲葉春生

会期:2010年12月7日[火]～
2011年1月30日[日]

岡山県立美術館では、総社市新本出身の日本画家・稲葉春生(1890～1976)について、これまで「岡山の美術展」日本画コーナーにおいて折に触れ紹介してきたが、このたび特別企画として生誕120年を記念し、彼の画業を紹介する展覧会を開催する。

春生は岡山日本画壇の振興のために尽力した画家として語られる場合が多いが、20年間の京都における修業時代では竹内栖鳳門下の精鋭達と競いながら日本画を学んでいた。35歳という遅いスタートでありながら、真摯に努力を続け5年後に日展入選を果たし、その後も入選を重ねた。今回の展示は、全体的には春生の京都時代に重点を置いた構成となっている。

ここで、今回初公開の23枚より成る画帖について一言紹介しておきたい。これは遺族の元に大切に保管されてきたもので、春生が孫の女兒をさまざまな角度から描いたものが中心となっている。各画面端に書かれた年記によると、昭和26～28年(1951～53)にわたっており、3歳前後の孫がお手伝いをしたり、お絵描きをしたり、ブランコで遊んだりする姿を追うように描き、60歳を過ぎた春生の日々の暮らしをかいま見ることができる。

池田達郎(1895～1988)は写生の鬼と言われ、毎日の食卓のおかずをすべて描いてから食事を始めたという。春生もまたスケッチを欠かさなかった。京都時代を回想し「最初の2、3年は明けてもくれても写生に没頭しました。毎日写生帳と鉛筆、絵具と筆、弁当を持って(中略)京都郊外を歩きまわり、花、風景、動物など手当たりしだい写生して、それをもとに10号程度の作品を仕上げました。写実こそ絵の基本と思っていましたし、そのころ、絵を志すものにとっては写生の勉強は当然だったのです。」「20年間に近い京都での日本画の修行は、充実した悔いのない歳月でした。毎日日々写生の材料を求めて京都中を歩き回ったものですから、しまいには、イタチの抜け穴まで知りつくしたという形容がぴったりです」と言っている。その姿勢は生涯続いていたことをこの画帖が物語る。※春生のことは「歳月の記 岡山文化人像」山陽新聞社 1971より引用

【主任学芸員 中村麻里子】



スケッチ帖の23枚のうち2枚

特別企画

内田百閒と谷中安規

平成23年2月1日(火)～3月21日(月祝)

「内田百閒文学賞」第10回を記念し、「岡山の美術展」特別企画として「内田百閒と谷中安規」を岡山県郷土文化財団と共催します。

作家・内田百閒(1889～1971)は、岡山市中区古京町の造り酒屋の一人息子として生まれました。1922年『冥途』の出版を皮切りに、1933年の著作『百鬼圖随筆』が評判を呼んだのをきっかけに人気作家となりました。随筆にすぐれ『ノラや』『阿房列車』などは、今も多くの人に読み継がれています。

ユーモア、諧謔、天真爛漫、偏屈、といった印象の彼の著作を飾った数々の装丁者のうち、戦前に多く関わったのが、版画家の谷中安規(1897～1946)です。安規は独学で木版画を学び、料治熊太の主宰した『白と黒』誌や日本版画協会展などに作品を発表しながら制作を行っていました。百閒は、貧困を抱えながらも飄々とした幻想世界を表現する安規を「風船画伯」と名付け、敬愛し思いやりました。それは戦中をはさみ、戦後まもなく安規が亡くなるその時まで続きます。

本企画では、まずは内田百閒の仕事で、岡山県郷土文化財団の所蔵する芳沢鉅介や織田一磨による装丁本や資料を中心に紹介します。続いて谷中安規の、時に奇怪で幻想的な世界が奔放に展開する版画作品を展示。そして二人の仕事として、最も充実した成果を見せた『王様の背中』肉筆挿絵入り本や『居候勿々』等の装丁に加え、谷中の書簡などの資料を通じ、2人の交流の様子を紹介します。それは軽妙なユーモアにあふれ、作品の上にも豊かに花開いています。文と装丁が響き合って紡ぐ世界をお楽しみください。

【学芸員 子川さつき】



内田百閒著／谷中安規装画
《絵入お伽噺 王様の背中》
岡山県郷土文化財団蔵

関連事業	記念講演会	2月19日(土) 13:30～	「内田百閒と装丁」 講師:万城あき氏(岡山県郷土文化財団) 講義室・2階展示室
	美術館講座	2月5日(土) 14:00～	「内田百閒と谷中安規」 講師:子川さつき 講義室
	美術の夕べ	2月25日(金) 18:00～	「内田百閒と谷中安規」をみる 講師:子川さつき 2階展示室
	記念座談会	3月18日(金) 13:30～	「第十回 岡山県「内田百閒文学賞」表彰式および記念座談会」 講師:奥泉 光(作家)、重松 清(作家)、鍵岡正謹(第十回 岡山県「内田百閒文学賞」運営委員会委員長、岡山県立美術館館長) 2階ホール